

## 素材について①

「素材なくして作品は成り立ちません。  
素材からも発想が生まれ、そして表現が生まれる。」  
学生時代、寺田栄次郎氏によるテンペラ技法などの  
絵画組成—支持体選択、下地塗り、絵の具作りを実際に行う授業で、  
創作の「元」を知る大切さを学びました。

大学卒業後、後藤茂・久恵 紙漉き職人から和紙の工程を学んだ際も、  
「せっかく美術を学んできたのであれば、和紙の元を辿ってみんさい。」  
の声掛けに、原料の楮（那須楮100匁、土佐楮10貫）を仕入れ、  
寒の入りから、寒明けまで水浸—外干しを20年繰り返し行う作業も面白く、  
寒晒し—木槌で叩く際に生じる様々な繊維の美しさにも魅了されてきました。

私にとって、美濃紙と楮は、表現に欠かせない素材であると思います。

## 素材について ②

35年間、美濃和紙を素材に創作を続けてきました。  
何故、年を重ねるごとに惹かれていくのか. . .  
故 後藤茂さんの言葉を 今一度、読み解いてみました。

「和紙に 表と裏があるのでしょか」  
「良い紙とは どの様な紙でしょか」  
の問いに茂さんは  
「使い手が決める事だよ」  
「使い道で決まる事だよ」と. . .

片面（表と裏）それぞれに施した彩色と、  
両面に染み入るように施した彩色は質感が異なります。  
あたりまえの様ですが、  
今回のテーマである『波紋～空紋』動揺を澄んだ心へと  
導かれる様な、内側にある想いを表現する為に  
表と裏の使い分けが必要でした。

本美濃和紙の定義では、  
干板に接する面が「表」とありますが、  
茂さんの紙の「表裏」は微妙です。

美濃和紙は『流し漉き』手法ですが、茂さんは  
紙肌の表情を決める漉はじめの動作、『化粧水』を  
数回繰り返し、  
水に身を委ねる様、前後左右に揺さぶりをかける『調子』の  
動作で厚さを決め、  
漉き終わりの『払い水』の動作で、紙肌を整えてみえました。  
重要無形文化財に指定された手法は、紙漉き職人の常に、  
向上しようと努める精神と共に存在していると感じています。

「和紙の 表裏 と 使い道」の言葉と、  
「赤ちゃんのうぶ毛の様な紙が漉けたらね、良いのにね。」  
の言霊が、現在も尚、宿っています。

私とその紙に惹かれながら創作をし続ける理由はここにあります。

### 素材について ③

典具帖紙（てんぐじょうし）は、  
手のひらに乗せると、手相が見えるほどの薄い和紙のこと。  
17世紀頃 美濃で漉かれていた 薄美濃和紙 を、  
基礎にして作られたと伝えられています。

岐阜提灯（美濃で生まれた極めて薄い、楮100%の手漉き和紙）も  
漉かれていた 茂氏は、薄美濃和紙を基本として、典具帖紙までの  
段階の薄さを漉く事の出来る紙漉き職人でした。  
その極めて薄い紙にも、人肌に似たあたたかさがあります。

「膝にあててごらん、あたたかいじゃろ。」と...

技術は勿論のこと、自身が求める紙をイメージし、漉かれた紙には  
意を写したかのように 一枚一枚に 命が宿っています。

制作活動を続けていくうえで、大切なことを  
今も、後藤茂 紙漉き職人の極めて薄い紙、  
薄美濃和紙，典具帖紙から教えてもらっています。